

—活動報告—

津波で崩壊した町に「雄勝まごのて診療所」を開設

山王 直子^{1,2,3} 石井 肇^{2,3}¹日本医科大学脳神経外科学²雄勝まごのて診療所, 宮城³山王クリニック, 東京

Why We Opened 'OGATSU Magonote Clinic' in Ogatsu, TSUNAMI Destroyed Town

Naoko Sanno^{1,2,3} and Hajime Ishii^{2,3}¹Department of Neurosurgery, Nippon Medical School²Ogatsu Magonote Clinic, Miyagi³Sanno Clinic, Tokyo

津波で壊滅的被害を受けた宮城県石巻市において、3月より復興支援団体「まごのて救援隊」を立ち上げ、支援活動を行っている。医療支援チームとして、毎週避難所に通い、診療を続けてきたが、2011年5月29日に石巻市雄勝（おがつ）町に「雄勝まごのて診療所」を開設した。診療所を開設するに至った経緯を報告したい。

まごのて救援隊とは？

「まごのて救援隊」は、平成23年3月11日におきた東日本大震災に遭い、一個人でなにかできることはないだろうか？と思い立ったことから、スタートした。震災翌日の3月12日、医師・山王（石井）直子と、石井肇の二人で、車に積めるだけの水や食料などを詰めてとにかく被災地に向かった。特に交通の遮断された地域や小規模の避難所・個人宅で避難される方々など大きな支援団体や国・自治体などでフォローできない方々が多くいらっしゃるという現状を目の当たりにした。私たちは、小規模ならではの小回りのきいた“かゆいところに手が届く”現地での支援を行いたいと感じ、平成23年3月25日に「まごのて救援隊」を立ち上げた。詳しくはまごのて救援隊のブログ <http://magonote99.blogspot.com/> をご覧いただきたい。

3月12日には水や食糧・灯油などを自家用車に積

んで、関越道を通り新潟周りで南相馬の避難所に物資を搬送した。港区のクリニック診療もあり、いったん帰京し、その間、どの地区に向かうべきか情報を収集し、3月19日には石巻地区を目指した。ネット上でSOSを訴える医師がいたからだ。3月20日に石巻市北上地区に支援物資を運んだ際に、避難所の受付担当者（雄勝町出身）より、「雄勝は道路が寸断され、物資が行き届かず陸の孤島化している。北上町も困っているが、もっと困っている地域がある。医者も足りない」と聞いて、積雪残る峠道を超えて雄勝町に入ったのが3月21日であった。

3月21日～4月の医療支援

雄勝町は町がすべて破壊され、目を疑う光景であった。海から数キロ離れた地点まで川をさかのぼって津波が到達し、町のすべてを洗いざらい持って行ってしまった。

3月21日雄勝に到着したとき、高台にあるごみ処理場、斎場が避難所となっていた。テントの仮支所で、「医師ですが何かお手伝いできることはありませんか？」と尋ねると、「医者がいなくて困っています。すぐに診療お願いします。」とそのまま直ちに避難所に連れて行かれ、畳の上に段ボール箱を置いて（写真1, 2）、避難所での診療が始まった。時期を同じくし



写真1 避難所での診療の様子 (2011年3月)



写真3 全壊し職員ほぼ全員が犠牲となった石巻市立雄勝病院



写真2 往診の様子 (2011年4月)

て日本赤十字, その他団体の医療チームが入り始めていたが, 避難所が点在しているため, すべてを回り切れてはいなかった。

もともと高血圧症の多い土地柄, 被災ストレス, 寒くて過酷な環境のため, 多くの方々は血圧が上昇していた。しかも10日間服薬していなかったのだ。医薬品として, 感冒薬, 解熱鎮痛剤, 抗生物質, 胃腸薬, 外傷の処置のための消毒薬, 睡眠薬, 安定剤などを準備し持参していたが, 降圧剤はすぐに底をついた。その時点の現地で最も必要だったのは, 降圧剤だった。これは見捨ててはおけない。そこで毎週時間の許す限り, 品川(東京)と雄勝を通う日々となった。

住民の方々は, 自分が服薬している薬の名前を全く覚えていない方がほとんどで, これも苦勞した。

医師「いつも飲んでいるお薬は? 血圧の薬ですか? コレステロール? 糖尿病はないの?」。

患者「血圧の薬だと思っただけけれども, 朝白いの1個, 夜赤いの1個, あとはよくわかんねえ…」という

具合。

持参した薬の中から, 選んで数日分を渡す。紙に1日1回, 朝食後と記載し渡す。カルテが整備されていないので, ノートに記載する。手さぐりの処方だった。

製薬会社には今後, 迅速な医薬品の供給および, 震災時にそなえた備蓄, 薬品保管庫の分散化, 医薬品のシートへの薬品名の明記, 薬への薬品名の印字, などをお願いしたい。

3月21日以降, 東京での診療を続けながら, 毎週日曜日と隔週木曜日, 避難所の巡回診療を行った。石巻市雄勝支所の保健福祉課からの依頼で, 日赤グループなどほかの医療チームと連携していくつかの避難所のうちの, 2カ所と役場の方々の定期的診療を続けた。当初は患者さんの被災前の病歴もわからず, 医薬品が不足し, 手さぐりの医療であったが, 通い続けるうちに, 町の再建のためには医療が不可欠であることが見えてきた。

雄勝町の再建のために

この町の医療機関は壊滅的打撃を受けた。中でも石巻市立雄勝病院は, 医師やコメディカルがほぼ全員津波の犠牲となった(写真3)。再建の見込みはほとんどない。町にあった個人医院は全壊し, 到底診療を再開できる状況ではない。

町の再建に何が必要だろう?

仕事ができなければ町に住むことができない。毎日の生活に食料品や日用品を買う商店・コンビニ・銀行・郵便局など生活基盤の整備が欠かせない。子供のいる家庭では学校が必須である。そしてやはり何にも増して, 医療は不可欠な要素である。町に医者がいなければ



写真4 雄勝まごの診療所

町民の方の善意で水産加工作業場の建物を無償でご提供いただき、2011年5月29日開院した。毎週日曜日と月曜日の2日診療。

ば、町の方々、特に持病を持つ高齢者は住むことができない。

雄勝町は人口4,300人（震災前）の漁業の町だったが、決して過疎の町ではなく、小学校・中学を含めて4つの学校があり、後継者もいる「活きた町」であった。

震災後2カ月を経過した5月始め、避難所の統合・縮小・閉鎖に伴い、巡回医療チームによる診療も、縮小の方向に向かった。同じ時期に仮設住宅の申し込みが始まり、町民は町に残るか出ていくか決断を迫られる時期となった。医療機関がなく、通院のための交通手段がないにも関わらず、医療支援は最低限しか保証されない状況であった。必要な医療サービスが受けられないのでは安心して住むことができない。

巡回方式の医療はその初期の役目を果たしたが、これからの地域医療は巡回方式では成り立たない。

「この町に残りたいけれど、病院がないから住めない。」という住民の声を聞き、少しでも多くの人に残ってもらいたい、医療がないために、ふるさとを離れていく町民に、思いとどまって戻って来てもらうために、私たちは診療所を開くことを決めた。

雄勝まごの診療所の開設

港区のクリニックと、300 km離れた2カ所の診療所開設という異例の業態となったが、宮城県の担当部署の迅速な対応で、決断からわずか2週間で開設の運びとなった。

開院にあたっては住民の協力も大きかった。地区会長に声をかけ、診療所に適切な場所がないかどうか、

あたっていただくと、町の水産業者の方にご紹介いただいた。「先生が来てくれるなら」と、二つ返事で、津波被害を免れた数少ない建物である水産作業場兼休憩室を、無償でご提供いただいた（写真4）。

診療所に必要な、机・椅子・診察ベッド・処置台等々も、町内の施設からお借りすることができた。

日曜日・月曜日の週2日だけの診療だが、町に診療所がある、医者がいる、ということで住民に安心していただき、町に帰ってもらいたい、あえてマスメディアの取材も受けた。新聞・テレビで取り上げていただくことで、町外日本全域に避難している町民に、雄勝に診療所ができたことを知ってもらいたかった。また、窮状を訴えることができない、小さな町があることが、日本全体の中で忘れられないためにも。

これからの被災地復興と支援のあり方

医療支援や義援金だけでは町の復興にはつながらない

まごのて救援隊では町役場・保健福祉課の運営サポート、カルテの整備、雄勝町・病院送迎サービス、無料健康相談室、津波で壊滅した小学校の再建支援、具体的には雄勝小学校、船越小学校の仮設教室準備、黒板やパーティション支給、入学式映像記録撮影、臨時スクールバス運行開始など様々な復興支援を行ってきた。

現実には仕事がないければ、町は再生できない。就職支援プロジェクトとして、「雄勝復興株式会社」を設立。以前からあった町の産業を復活し、さらに魅力を引き出す方向で、安定した雇用を提供して町の復興につなげていきたいと考えている。

雄勝町は日本一の硯（すずり）の産地でもある。雄勝石は国の重要文化財のJR東京駅の屋根材としても使用されている。私達は、雄勝硯生産販売協同組合と協力して、がれきとして処分される前に散逸した雄勝石をすこしでも回収し保存するプロジェクトを企画し、ゴールデンウィークに多くのボランティアの参加で、多数の貴重な雄勝石を回収することができた。

雄勝町は現在周辺地域も含めて約1,000人しか住民が残っていない。今後どの程度戻ってくるかは予測できないが、震災前の4,300人に戻ることはまず不可能と思われる。

この地区に病院・診療所を建設することは、現実問題個人レベルでは困難である。全く採算が取れる見込みがないからである。これはひとり被災地のみならず、日本に多く存在する過疎地医療の問題点であろう。過疎地にて診療する医療機関・医師に何らかの行

政の補助や優遇措置が必要なのではないだろうか。

採算が取れないからといって医療サービスが受けられない、という事態はあってはならない。このような地区こそ、行政の力で早急に医療体制を整えるべきであることを強く訴えたい。

「雄勝まごのて診療所」は、この町の住民が安心できる医療体制が整うまで、無期限で週2日の診療を続

けていく予定である。

まごのて救援隊ブログ：<http://magonote99.blogspot.com/>

微力ながら、私達の活動が復興支援の一つのモデルケースになればと考えている。

(受付：2011年9月2日)

(受理：2011年9月8日)
